チュッチェフの作品における「不可解さ」をめぐって
――19世紀ロシアに見られる、政治思想と抒情詩の「他者」――

坂庭　淳史

はじめに

本論考では19世紀ロシアという場において書かれたフョードル・チュッチェフ（1803-1873）の作品に対し、現代においてどのようなアプローチが可能であるのか、また彼の作品にどのような意味を見出していくことができるのかを考察してゆく。

まずは、近年のチュッチェフ作品の読まれ方を3点示しながら、問題を提起したい。

第1には、チュッチェフは抒情詩においてコミュニケーションの限界を感じていたのではないか、という指摘である。現代詩人ラリーサ・ミレルはエッセーの中で詩「シレンチウム！」（Silentium!, -1830）の一節を引用しながら「『語られてしまった思想は偽りなのだ（Мысль изреченная есть ложь）』、己の感情を的確に伝えることに絶望した詩人［チュッチェフ］はこう結論している」[1] と記している。このエッセー自体は詩を媒介とする言語コミュニケーションの難しさをテーマとしていて興味深いものである。だが、その冒頭で掲げられたチュッチェフの詩行は現代詩人たちの思考の出発点として意義を与えられてはいるものの、現代の意識とは切り離されている。つまり、コミュニケーションに絶望した19世紀詩人チュッチェフと、コミュニケーションを模索している現代詩人たちとの違いである。はたして、チュッチェフと21世紀を生きる私たちとは一線を画さねばならないのだろうか。

第2にはチュッチェフをスラヴ派、およびナショナリズムの思考の中に取り込もうとする議論である。例えば、イテンベルクは「世界史的な役割は（チャアダーエフが確信していたように）カトリックの西欧ではなく、正教のロシアにある。ロシアは西欧と異なる発展の道を歩みつづけ、独自の使命を果たさなければならない」というスラヴ派の思想とチュッチェフの詩「ロシアは頭ではわからない…」（Умом Россию не понять..., 1866）を端的に結びつけている。[2] たしかに、チュッチェフは保守的な思想の持ち主であり、娘婿であるイヴァン・アクサーコフをはじめ、スラヴ派の論客たちとも交流があった。そうした事実もあるせいか、この「ロシアは頭ではわからない」という言葉は、「ロシアの異質性は外国人には理解できない」というメッセージとしてしばしば受け取られてきた。しかし、ロシアを理

---

[1] *Миллер Л.Е.* Перевод с родного на родной // Мотив: Книга стихов: К себе, от себя: Рассказы, статья, эссе. М.: Аграф, 2002. С. 141.　引用したエッセーは 1997 年に書かれている。

[2] *Итенберг Б.С.* Российская интеллигенция и Запад: Век XIX: Очерк. М.: Наука, 1999. С. 26.

解できないとされるのは「頭（ум）」である。「頭」とは必ずしも外国人に特有のものではなく、ロシア人にも備わっているものだ。また、チュッチェフ自身がロシア人として「ロシアを理解している」という確固たる自覚を示してはいない。つまり、この詩は排他的に、異文化理解や文化交流の不可能性を直接に説くようなものではないのだ。

第3は、チュッチェフ研究全体に関わる問題である。彼の著作は大まかに抒情詩と政治論文（および政治詩）に分けられるが、研究者たちの多くはそれぞれのジャンルを結びつけることなく別個に考察してきている。本論考では、二つのジャンルを合わせて分析しながら、チュッチェフ作品についての新たな読み方を提示するものである。

1. 政治論文における「不可解さ」

チュッチェフは詩人である一方で外交官（後年は検閲官）でもあり、長くヨーロッパで暮らした。政府の外政に関連して彼はいくつかの政治論文を記したが、その最初の論文がアウグスブルクの新聞『アルゲマイネ・ツァイトゥング（Allgemeine Zeitung）』に発表した「ロシアとドイツ（Россия и Германия）」[3] である。この論文を扱う前段階として、フランス人作家キュスティーヌ伯爵の著書『1839年のロシア（La Russie en 1839）』に注目しておきたい。チュッチェフが論文を書く契機のひとつとなったのが、この著作だからである。

1-1. キュスティーヌ『1839年のロシア』（1843）

1843年にパリで発表されたこの著作は、英語、ドイツ語、スウェーデン語に翻訳され、ヨーロッパ、ロシアでさまざまな議論を呼び起こした。当時、ヨーロッパのマスコミにおいて強烈なロシア・バッシングが繰り広げられていたが、『1839年のロシア』はその代表的な作品と言える。まずはおもな内容について確認しておこう。

第1には、ロシアにおける皇帝ニコライ1世の絶対的な存在である。キュスティーヌは「皇帝は帝国そのもの」、「君主は神である」[4] として、ニコライ1世を中心に国家が出来上がっていること、さらに皇帝を神格化しているロシアの人々の妄信ぶりを伝えている。

第2には、ロシアが西欧のコピーでしかないことである。彼は、ロシアの首都ペテルブルクに対しても「粘土の足を持った巨人［みかけだおし］、このおとぎ話のように豪華な町は、文明化されたヨーロッパのどの町にも似ていない。こうした町をコピーして作ったにもかかわらずだ」[5] と述べている。

第3には、「中国の壁」である。彼は「フランスとロシアを中国の壁が隔てている。それはスラヴの性格、スラヴの言葉である。ピョートル大帝以降、いかなる点においてロシア

---

[3] 原文はフランス語で、アウグスブルクの新聞『アルゲマイネ・ツァイトゥング』の編集者グスタフ・コルプに宛てた書簡（Lettre à M.le Docteur Gustave Kolb, rédacteur de la «Gazette Universelle»）として最初に同新聞に掲載された。

[4] *Кюстин А.де* Россия в 1839 году: В 2 т. М.: Терра, 2000. Т. 1. С. 180.

[5] Там же. С. 238.

が主張しようとも、シベリアはヴィスワ川から始まっている」[6] と論じてロシアをヨーロッパから切り離し、ヨーロッパというマスクの下に潜むロシアのアジア性を見ている。

第4には、著作全体に通じるキュスティーヌの姿勢である。彼はロシアのさまざまな事象について「謎」であるとしながら、ひとつの節の題で「ロシアの謎は解かれた」としている。この姿勢は後にチュッチェフの政治論文を考える上で重要な表現となってくる。

ここでは第3に指摘した「中国の壁」について考えたい。ヨーロッパとロシアを分断するこの壁は何を意味するのだろうか。この「壁」は、エドワード・サイードの著書『オリエンタリズム』にある以下のような言葉を髣髴とさせる。

> 私がここで「恣意的」という言葉を用いるのは、「我々の土地――野蛮人の土地」式の心象地理において、野蛮人の側がこの区別を承認する必要がまったくないからである。「我々」は自分の心のなかで勝手にこうした境界線を設けさえすれば十分なのであり、その結果「彼ら」はおのずと「彼ら」になり、彼らの領域と彼らのメンタリティーとは、「我々」のそれとは異なったものとして示されることになる。近代社会も原始社会も、ある程度までこうした消極的(ネガティヴ)なやり方で、自分たちのアイデンティティーの感覚を引き出してきたように思われる。[7]（下線強調は引用者）

「中国の壁」はまさにこの境界線の役割を持っていた。キュスティーヌは当初からロシアとヨーロッパを切り離して考えようとしている。ロシアを訪れる前年にスペインについての旅行記『フェルナンド7世体制下のスペイン（L'Espagne sous Ferdinand VII）』を発表した彼は、自身の理解しているヨーロッパ（ローマ教会、ローマ帝国）とは違った「非ヨーロッパ世界（the non-European world）」に触れることを旅行記執筆の目的のひとつとしており、彼にとってロシアもまた「ヨーロッパ大陸の延長を構成しているとはいえ、ヨーロッパのどの国よりもオリエントに近い」[8] 国であった。こうした事実をふまえるならば、『オリエンタリズム』においてサイードが指摘する思想に近いものが、「壁」やロシアの「古い政治体制」や「皇帝の神格化」とあいまって、当時、「ヨーロッパの憲兵」を自認して破竹の勢いを誇っていた新興勢力ロシアに対しても向けられていたと考えることができるだろう。

1-2. チュッチェフ「ロシアとドイツ」（1844）

この『1839年のロシア』に代表されるような、反ロシア的な言説に対して書かれたのがチュッチェフの論文「ロシアとドイツ」であった。これはヨーロッパのメディアにおいて、

---

[6] Там же. С. 218.

[7] E.W. Said, *Orientalism* (Harmondsworth: Penguin, 1991), p. 54.（日本語訳はエドワード・W.サイード『オリエンタリズム（上）』板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社〈平凡社ライブラリー11〉、130 頁。）

[8] G.F. Kennan, *The Marquis de Custine and His Russia in 1839* (Princeton: Princeton university press, 1971), p. 16.

ロシア側からの発言が初めて反響を得た論文である。この論文のねらいは当時のロシア政府の意向とほぼ一致しており、「ロシアを主導的立場とする神聖同盟の理念の正当化とその体制維持」、「ドイツのメディアにおける反ロシア感情の払拭」、「国際舞台でのロシアの孤立防止」などがある。だが、本論考で注目したいのはこれらのねらいではなく、「西欧」と「東欧」を論じた文章の中に見えてくるチュッチェフ自身の世界観である。

第1には「西欧」と「東欧」[9] の関係である。チュッチェフによれば「東欧」（ロシアはその「魂」）とは「独自の原理によってひとつにまとまっている世界」であり、もう一つの「ヨーロッパ」である。そして、彼は「カール大帝のヨーロッパ」と「ピョートル大帝のヨーロッパ」という二つの「ヨーロッパ」が存在することを述べている。二つの「ヨーロッパ」を提示することは、ロシアとヨーロッパを分けるキュスティーヌの論理にも近いように思われるが、この二つの「ヨーロッパ」の関係についてチュッチェフは、「東欧」は「西欧」にとって「キリスト教を奉ずる点で法律上の妹」（III-118）[10] だとしている。すなわち、「西欧」と「東欧」を分けながらも、完全に切り離すのではなく「法律上の妹」というつながりを見出しているのである。この関係性こそが、彼の思考の特徴である。未完の論文集『ロシアと西欧（Россия и Запад）』の中でも、彼は「ヨーロッパ」の革命の問題に触れ、「西欧とは、ひとつの大いなる有機体の半分に過ぎない。西欧が被っている、外部からは解決不可能な困難を解決できるのは、有機体のもう半分だけである」（III-187）と記して、「西欧」と「東欧」をひとつの有機体（チュッチェフの言う「ヨーロッパ」）として認識している。基本的にヨーロッパとロシアの差異やロシアの孤立状態を強調する「哲学書簡」のチャアダーエフ、あるいはスラヴ派とは対照的なこの思考は、1841年に私的な理由で解職されていたとはいえ、極論を避けて中立を保とうとする外交官チュッチェフの面目躍如とも言えるだろう。

第2には、これまでの「東欧」に対する「西欧」の態度であり、チュッチェフは「現代人のコロンブスに対する態度」になぞらえながら批判している。

> 旧大陸の人々は、コロンブスの不朽の発見を賞賛しつつも、新大陸の存在を長い間かたくなに否定し[…]それどころか[…]彼らが親しんできた半球の延長あるいは付属物であるという説を、より自然で合理的な考えとしてきた。[…]西欧が東欧に抱く印象もこ

---

[9] チュッチェフの言う「ヨーロッパ」とは「西欧」と「東欧」を合わせたもの（「西欧」、「東欧」それぞれが「ヨーロッパ」でもある）で、キュスティーヌの言うヨーロッパ（ロシアは切り離されている）とは異なっている。以降、本論考では、チュッチェフの論文からの直接の引用以外で、彼が用いる意味での「ヨーロッパ」「西欧」「東欧」を示す場合には「ヨーロッパ」、のように「　」を付して記すこととする。

[10] 原文では、西欧は l'Occident chrétien とされて il で受けられ、東欧は Europe orientale となっている。ロシア語訳でも西欧は христианский Запад と示されて он で受けられ、東欧 Восточная Европа は女性 она として示されている。つまり、西欧は男性名詞、東欧は女性名詞で表現されている。なお、本論考におけるチュッチェフ作品の引用は *Тютчев Ф.И.* Полное собрание сочинений и письма: В 6 т. М.: Классика, 2002-.により、カッコ内に巻数と頁数を示す。

れと同じで、西欧の人々は自分たちとは別のもう一つのヨーロッパが存在し得ないのだと信じてきた。（III-117, 118）

同じような考えを彼はまた別の文章においても述べている。

東方帝国は、西欧の科学にとってつねに謎であった。西欧の科学は東方帝国をうまく非難し得たが、決して理解することはできなかった。最近キュスティーヌ氏が無知によって倍加された憎悪のショールを通してロシアを裁いたように、西欧の科学は東方帝国について裁いたのである。（III-136）（下線は引用者）

これはチュッチェフがニコライ1世に直接宛てた、「覚書（записка）」と呼ばれるものである。後に外務省への復帰を果たす、いわば就職活動中の彼の言説であり、内容と語調の厳しさは、当時ヨーロッパのメディアで繰り広げられる（ロシアおよび専制への）批判にナーバスになっていた皇帝や政府に多少なりとも迎合しているように思われる。一方で、チュッチェフは、キュスティーヌの著書に肯定的な反応も見せていた。ドイツ人文学者でキュスティーヌの友人でもあるファルンハーゲン・フォン・エンゼとの会話の中で「キュスティーヌに対して彼［チュッチェフ］は極めておだやかで、多くの点を訂正しつつ、その価値を認めてもいた」[11] という。これまでの考察を総合するならば、チュッチェフは論文「ロシアとドイツ」において「相手の得体の知れない、不可解な部分をそのまま受け入れるのではなく、自分たちの尺度で理解してしまうこと、すべて理解し得たと合点してしまうこと」の危険性を読者たちに伝えようとしていたのではないだろうか。一つの世界には二つの独自の原理が存在し、一方には他方にとって不可解な部分がある。こうした構図が、彼のコミュニケーション観の基本になっている。「不可解」な点をあえて残すことで理解の完了（キュスティーヌの言う「謎は解かれた」）を留保する思考は、当時の政府やスラヴ派のそれとは似て非なるものなのである。

第3には、彼が「ロシア」を「西欧（ドイツ）」の目で見ていることである。論文の冒頭においてロシア政府と自身の隔たりを強調したチュッチェフの語り口は、「あなたたちの考え方は間違っている。私たちの考え方は…」というものではなく、「考えてみてください。ロシアとは…」と、あくまで視点を西欧側に置いたものである。彼はロシアの存在意義について、「ロシアとは何か？　その存在の意味と歴史的な原理とは？　ロシアはどこから来たのか？　どこへ行くのか？　何を表現しているのか？」（III-117）と記しているが、この問いかけは当然ロシア人自身に対するものではなく、論文の主な読者となるであろうドイツ、あるいはヨーロッパの人々にまず向けられている。『アルゲマイネ・ツァイトゥング』紙は当時のヨーロッパで最もポピュラーな新聞のひとつでもあったが、つまり、彼はここでロシアの存在意義についてロシア自身の視点ではなく、他者の眼を用いて考えているのだ。

[11] *Осповат А.Л.* Тютчев и заграничная служба III отделения (Материалы к теме) // Тыняновский сборник: Пятые Тыняновские чтения. Рига-М., 1994. С. 127.

論文「ロシアとドイツ」から明らかになるチュッチェフの世界観について確認しておこう。まず、「ヨーロッパ」には「西欧」と「東欧」という二つの原理があるがこれらは完全には離れていないこと、次に、「東欧」の側には「西欧」が把握できる部分と、把握できない「不可解な部分」があるということ、さらに、自身（「東欧（ロシア）」）を他者（「西欧」）の視点で眺めるということであった。彼は「東欧（ロシア）」にとっての「西欧」の存在の必要性を感じていた。もちろん、「分裂しているわけではない、二つの『ヨーロッパ』」という解釈は、当時の世界情勢においてロシアの外交にたずさわる者がとらざるを得ないものでもある。「東欧（ロシア）」が「ヨーロッパ」であることを伝えるためには、「西欧」側の視点を持つことが有効でもあっただろう。しかし、チュッチェフはまた別の観点からも「西欧」の必要性を見出しているのである。ここに、チュッチェフの政治論文と抒情詩の世界をつなぐ鍵がある。

2. 抒情詩における「不可解さ」

これまでチュッチェフの政治論文を考察してきたが、彼の抒情詩の世界にも目を向けたい。ここでは『デニーシエヴァ・シリーズ（денисьевский цикл）』（以下『シリーズ』）と言われる、1850年代から1860年代にかけて書かれた自伝的な恋愛詩の中から2篇の詩を取り上げる。『シリーズ』に登場する「主人公」はほぼチュッチェフ自身であると考えられる。

2-1. 詩「言わないで。彼がわたしを、昔のように愛している、と…」（1852）

Не говори: меня он, как и прежде, любит,	言わないで。彼がわたしを、昔のように愛している、と
Мной, как и прежде, дорожит...	わたしを、昔のように大切にしている、と…
О нет! Он жизнь мою бесчеловечно губит,	おお、ちがう！　彼はわたしの生命を非情にも壊していく
Хоть, вижу, нож в руке его дрожит...	彼の掌中でナイフは震えているけれど…
То в гневе, то в слезах, тоскуя, негодуя,	怒り、涙し、恋焦がれ、憤り、
Увлечена, в душе уязвлена,	惚れさせられ、こころを傷つけられて
Я стражду, не живу... им, им одним живу я—	わたしは苦しみ、生きていない…彼を、ただ彼のみを糧に生きるわたし—
Но зта жизнь!.. О, как горька она!	だがこの人生よ！…、何とつらいことか！
Он мерит воздух мне так бережно и скудно...	彼は慎重に、僅かばかりの空気を私に分け与える…
Не мерят так и лютому врагу...	残忍な敵にも、かくはすまい…
Ох, я дышу еще болезненно и трудно,	ああ、息することさえつらく、ままならぬ
Могу дышать, но жить уж не могу.	息はつけても、もはや生きられぬ。（II-52、下線は引用者）

この詩（以下詩①）のリズムは6脚弱強格と5脚弱強格が交互に繰り返されている。また、「抒情的我」がヒロインであり、つまり「ロール・リリック」であるのが大きな特徴である。しかし、先行研究[12]ではこの「ロール・リリック」という形式がクローズアップされるばかりで、こうした実験的な作品をチュッチェフが書いた理由についてはこれまで十分に考察されてきていない。また、詩①（ヒロインの悲痛な叫び）に対応して、ヒロインを宥め弁解する主人公のモノローグである詩「おお、もっともな叱責で私を苦しめないでおくれ！…」（O, не тревожь меня укорой справедливой!..., 1850-51）（以下詩②）の存在について触れていない点において不十分であると思われる。創作年代に若干のずれはあるものの、形式、内容から考えれば、この2篇の詩に密接なつながりがあることは明らかであり、多くの作品集において並べて収録されている。そこで、本論考では2篇の詩を併せて考察していくこととする。

2-2.　詩「おお、もっともな叱責で私を苦しめないでおくれ！…」（1850-51）

О, не тревожь меня укорой справедливой!	おお、もっともな叱責で私を苦しめないでおくれ！
Поверь, из нас из двух завидней часть твоя:	信じておくれ、私たちふたりのうち、羨むべきは君の運命なのだ。
Ты любишь искренно и пламенно, а я—	君は心から燃えるように愛する、しかし私は—
Я на тебя гляжу с досадою ревнивой.	私は怒り、妬みながら、君を見つめる。
И, жалкий чародей, перед волшебным миром,	哀れな魔法使いの私、自分が作り上げた
Мной созданным самим, без веры я стою—	魅惑の世界を前に、信ずることなく立ち尽くす—
И самого себя, краснея, сознаю	頬を赤らめて己を知る
Живой души твоей безжизненным кумиром.	君の生きる心の、生なき偶像だと。（Ⅱ-42）

この詩（以下詩②）のリズムは6脚弱強格である。まず確認したいのは、2篇の詩によって主人公とヒロインの会話が成立しているわけではないことだ。詩①は主人公について語られているとはいえ、主人公の知らない「第三者」（ヒロインの内面の分裂、あるいは全くの別の人物と考えられるだろう）へ向けたヒロインの嘆きの言葉であり、詩②は主人公からヒロインへの弁明のように響く。また、形式面では詩①は基本的に6脚と5脚弱強格の繰り返しであり、第1連の2行目のみが4脚となっている。さらに、この一行のみの特別なリズムが「第三者」が発した言葉「私を、昔のように大切にしている、と…」に対して与えられていることに注目する必要がある。つまり、この一行は形式においても、内容においても「不可解さ」を備えているのだ。また、6脚弱強格というリズムが2篇の詩に共通して使

[12] *Берковский Н.Я.* Вступительная статья // *Тютчев Ф.И.* Стихотворения. М.: Сов. писатель, 1962. С. 76.　あるいは、A. Liberman, *On the Heights of Creation: The Lyrics of Fedor Tyutchev* (Greenwich, Conn.: Jai Press , 1993), p. 264.

われている。このリズムがチュッチェフの（翻訳を除く）詩作品全体において7.5%[13]という稀有なものであることからも、2篇の詩の結びつきはより明らかであろう。

共通するリズムの一方で、詩①には主人公にとって「不可解」な存在である「第三者」、4脚弱強格のリズムがある。元来、抒情詩の世界においてチュッチェフは真実を解明することを急いでこなかった。むしろ、真実とは何か、どう考えてゆけばよいのか、と問いを発すること自体に意味を求めてきた。詩「プロブレム」（Problème, 1833）にはその姿勢が如実に現れている。

С горы скатившись, камень лег в долине—	山から転がってきて、石が谷間にあった—
Как он упал? никто не знает ныне—	どうやって落ちてきたのだろう？　いまはだれも知らない—
Сорвался ль он с вершины сам собой,	頂上から自分で転げ落ちたのか、
Иль был низринут волею чужой!…	それとも何者かの意思で降ろされたのか！…
Столетье за столетьем пронеслося,	百年、また百年と時はすぎた、
Никто еще не разрешил вопроса.…	問題はまだだれも解けない…（I -150）

チュッチェフにとって真実をめぐる思考は閉じられたものではなく、「石」には何らかの不可解さが残されていることが分かる。では、この不可解な要素の存在にはどんな意味があるのだろうか。

2-3.　チュッチェフの抒情詩における世界観

詩①でチュッチェフはロール・リリックという形式を用いたが、同時に『シリーズ』本来の「抒情的我」である主人公を「彼」として登場させている。つまり、単に「抒情的我」を通常とは別の主体に置き換えただけでなく、チュッチェフは「他者の眼」を用いて自己（主人公）を見つめ、描いているのである。さらに詩②では、ヒロインにとっての「生きる心の、生なき偶像（Живой души твоей безжизненным кумиром）」としての「己を知る」ことになる。先行研究ではこの点がほとんど注目されていなかった。チュッチェフにとってロール・リリックは「他者の眼」から「自己」を見るためのものであり、その他者の中には「不可解さ」があるのだ。2篇の詩に見られる主人公とヒロインの関係をもう一度考えてみると、1-2で述べた「西欧」と「東欧」の関係と同じ構図が出来上がっていることが理解できるだろう。つまり、一つの世界（詩①、②）には二つの独自の原理（詩①ヒロイン、詩②主人公）が存在し、一方（ヒロイン）には他方（主人公）が「不可解な部分（『第三者』）」がある。この「不可解さ」は形式面でも一行の4脚弱強格として表されている。そして、この2篇の詩を考える際にも、政治論文における「西欧」と「東欧」についての思考においてチュッチェフが他者から自己への視点の可能性を模索していたこと、他者の中の「不可解さ」を

[13] *Новинская Л.П.* Метрика и строфика Ф.И.Тютчева // Русское стихосложение XIX в. Ред. Кол. М.Л. Гаспарова. М.: Наука, 1979. С. 358.

残していたことを忘れてはならない。チュッチェフの基本的な世界観が、政治論文、抒情詩、それぞれの世界で展開されているのである。紙面の制約からここで詳細に触れることはできないが、「不可解さ」を含むこの構図は、さらに同時期の詩「おお、預言的なわが魂よ…」（О вещая душа моя!..., 1855）（II-75）で描かれた「内的世界」にも見出すことができる。「内的世界」には「心（сердце）」と「魂（душа）」という二つの原理があり、さらに「魂」は「昼（день）」と「眠り（сон）」の要素に分かれ、「眠り（сон）」の要素は「予言めいて不可解（пророчески-неясный）」なのである。

この「不可解さ」について、今度は「抒情的我と作者の距離」という観点から考えてみたい。通常、抒情詩においては「抒情的我」と「作者」は混在し、その境界は把握しがたく、また自律性を持った完全な他者は提示されない。[14] 詩①での「抒情的我」は、ヒロインという「他者としての我（чужое «я»）」[15] であり、この形式自体がすでに他者性を指向しているが、さらに作者は詩②の「抒情的我」である主人公にとっては全く理解が及ばないような「第三者」を登場させ、ヒロインをその「第三者」と会話させることによって、ヒロインの世界に自律性を与えており、形式面でも、2篇全体を通してこの部分だけが特別なリズムになっている。結果的に、ヒロインにはチュッチェフの他の作品にはない自律性や他者性が付与されている。チュッチェフは、このようにして通常の抒情詩の枠組みを超えようとしていたのではないだろうか。

これらの詩では、登場人物の自己意識が分析されながら、同時に詩人によっても把握できていない、自律的な部分がわずかながら作り出されていた。もちろん、ヒロインの「不可解さ」を生み出す詩①のような「ロール・リリック」を作り続けていけば、詩は大きな内容を持つことになり、もはや純粋な抒情詩とは言えなくなってしまうだろう。しかし、チュッチェフの作品の意義は、ドストエフスキーが小説で行なったのと同様の、自己意識をめぐる「コペルニクス的転回」[16] を抒情詩というミクロ・コスモスの中で示したことにあるのだ。

---

[14] 「抒情詩における主人公と作者の近さは、伝記に劣らず明らかである。[…]作者はいわば、主人公のすべてを透過していて、彼にはその内奥に自立のための潜在的な可能性しか残さない。主人公に対する作者の勝利はあまりにも完ぺきで、主人公は完全に無力なものとなっている。[…]抒情詩には二つの個体ではなくて、ただ一つの個体しかないように見える。作者の圏域と主人公の圏域が融合して、両者の中心が一致しているのである」（*Бахтин М.М.* Работы 20-х годов. Киев: Next, 1994. С. 222.　日本語訳はミハイル・バフチン『ミハイル・バフチン著作集 2』斎藤俊雄・佐々木寛訳、新時代社、1984 年、252-253 頁。）

[15] *Берковский Н.Я.* Вступительная статья. С. 76.

[16] ドストエフスキーが『貧しき人々』（Бедные люди, 1846）において、マカール・ジェーヴシキンにゴーゴリの『外套（Шинель）』を読ませていることについて触れながら、バフチンは「小さな規模のコペルニクス的転回」として以下のように記している。
「作家の行なっていた役割をいまや主人公が行ない、自分自身をありとあらゆる視点から解明してゆく。一方作者が解明するのはすでに主人公の現実ではなく、第二次的現実としての主人公の自意識なのである」（*Бахтин М.М.* Проблемы творчества Достоевского. М.: Алконост, 1994. С. 40. 日本語訳はミハイル・バフチン『ドストエフスキーの詩学』望月哲男・鈴木淳一訳、筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉、1995 年、102 頁。）

3. まとめ――政治論文と抒情詩をつなぐ世界観

これまで政治論文と抒情詩においてチュッチェフがロシア、『シリーズ』のヒロイン（さらには内的世界）に付した「不可解さ」を考察してきたが、この「不可解さ」にはどんな意味があったのだろうか。

「不可解さ」という言葉について、サイードの『オリエンタリズム』に関する西川長夫氏の興味深い指摘がある。西川氏は、サイードによるフローベールとネルヴァルの作品の比較を援用しつつ、「フローベールがいかにしてオリエンタリズムからまぬがれえたか」を説明している。西川氏はまず『オリエンタリズム』にある、以下のような文章を引用する。

> ネルヴァルが実体のないオリエントという負のヴィジョンをもっていたのに比べると、フローベールのそれは極めて実質に富んでいる。彼の旅行ノートや書簡類からは、さまざまの事件や人物や舞台背景を几帳面に報告しながら、その奇抜さを楽しみ、眼前の不可解さを解決しようともせずにいる一人の人間の姿が髣髴と浮かんでくる。[17]
> （下線強調は坂庭）

西川氏はこの「眼前の不可解さを解決しようともせずにいる」という表現に注目する。

> 「眼前の不可解さを解決しようともせずにいる」という一句はその方法を示すものとして注目に値する。シャトーブリアンやラマルチーヌであれば、「眼前の不可解」はたちどころに解決されたであろう。「不可解」を解決するのは既成のイデオロギーである。フローベールは「不可解」を解決せずに、その前に立ち止まる。[18]

もちろん、西川氏も指摘しているようにこのフローベールの態度がオリエンタリズムを完全に脱却し得たというわけではない。しかし、ここには脱却のためのひとつのヒントが提示されている。そして、このフローベールの態度を、描写する対象のそれぞれに「不可解さ」を認めたチュッチェフの態度と重ねあわせて考えることができるだろう。

サイードはオリエンタリズムを閉ざされた空間とし、「全東洋が閉じ込められた舞台」であり、「ヨーロッパに附属する演劇舞台」とした。オリエンタリストという演出家によってオリエントが表象されるその舞台は、ヨーロッパ人を観客とし、すべてはヨーロッパ人のために作られている。チュッチェフの著作が自己充足的な世界に少しでも陥らなかったとするならば、それは他者を描写する際に、他者の持つ「不可解さ」をそのまま残したためであろう。そのため、詩②に描き出されたチュッチェフ自身の化身とも言える「哀れな魔法

---

[17] E.W. Said, *Orientalism*, p. 184.（日本語訳はエドワード・W.サイード『オリエンタリズム（上）』421 頁。）

[18] 西川長夫『国境の越え方：国民国家論序説』平凡社〈平凡社ライブラリー380〉、増補、2001 年、90-91 頁。

使い（жалкий чародей）」は己の作り出した世界に対して無力なのである。そして、その不可解な他者の眼を感じることで、チュッチェフは自身の内部にもまた「不可解さ」を見出し、確固たる自己意識が生み出されてきている。チュッチェフの思想においては自己にも、他者にも、そしてロシアにも「不可解さ」が与えられ、この「不可解さ」こそがそれぞれの存在の重要な根拠のひとつとなるのである。

本論考では、19世紀ロシアの文学者であり外交官でもあったチュッチェフの作品の考察を通して、ヨーロッパとロシアの関係が、文学作品とも共鳴しながら特徴的な世界観を生み出していることが理解されたように思われる。もちろん、ヨーロッパから見てロシアはオリエントほどかけ離れた存在ではない。しかし、19世紀の一時期、世界の舞台に主要人物の一人として現れたロシア、そして、見る側であり、見られる側でもあったロシアにおいてこそ、チュッチェフのような思想が生まれてきたのだと言えるのではないだろうか。

サイードは『オリエンタリズム』の中で、自身が著書において十分に果たしえなかった「もっとも重要な仕事」として「他者を抑圧したり操作したりするのではない自由擁護の立場に立って、異種の文化や異種の民族を研究することが可能であるかを問いかけること」[19]を述べている。文化、民族のレベルだけでなく、個人のレベルでも重要な問題であるが、チュッチェフが作品中で提示した「不可解さ」もまたそれを解くヒントのひとつとなるはずだ。1860年代および晩年のチュッチェフの作品にはスラヴ派思想のプロパガンダのような詩も見られるし、あるいはチュッチェフが「西欧」に対して、あるいは「ヨーロッパ」以外の世界に対してどれだけの「不可解さ」を認めていたか、などを考えると、チュッチェフが一貫して「他者の不可解さ」を保持していたとは言いがたい。だが、適切な使い方をもってすれば、『シリーズ』における関係性や内的世界の構図は、オリエンタリズムを乗り越える可能性を秘めている。相手を「理解できない」、「理解しようとしない」という消極的な態度ではなく、「不可解さ」を前提とする積極的な相互理解なのである。

冒頭での問題提起の際に詩人ミレルのエッセーについて触れたが、彼女はチュッチェフの絶望を出発点としてコミュニケーションを模索する現代詩人たちの結論として、「私たちを結びつけるのは何か？　私たちすべてを？　それはたがいに理解できないということ（Что связывает нас? Всех нас? / Взаимное непониманье.）」というゲオルギー・イヴァーノフの詩を引用している。そして、「理解できない」ことを前提とし、自分の流儀ですべて理解し得たと合点してしまうことに釘を刺すことで、この一見物悲しいフレーズに楽天的な響きを与えている。[20] これまでの本論考での考察からすれば、むしろチュッチェフと現代のこうした思考の間に壁はなく、彼の思想は現代のコミュニケーションのスタイルを先取りしていたとも言えるのではないだろうか。

---

[19] E.W. Said, *Orientalism*, p. 24.（日本語訳はエドワード・W.サイード『オリエンタリズム（上）』65 頁。）

[20] *Миллер Л.Е.* Мотив: Книга стихов. С. 142-143.